

HIMALAYA

ヒマラヤ No.394



2004 SEP



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2005年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2005年7月15日(金)～8月22日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シジャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2005年7月23日～8月28日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。

表紙写真

サセル・カンリIV(7,364m)の山頂に立つと、コルをへだててI峰へ続く鋭い稜線が姿を見せた。

(文・写真：サティヤブラタ・ダム)

ヒマラヤ No. 394

- | | |
|---------------------------------|------------|
| 1. 黄色の大地の女神を鎮める | サティヤブラタ・ダム |
| 6. 初めてのネパール | 金川美代子 |
| 9. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉 | |
| 11. 日本隊によるヒマラヤ高峰初登頂 | 山森 欣一 |
| 16. ダウラギリ I 入山者〔1970-2001=32年間〕 | |
| 22. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑(9) | |
| 24. 事務局日誌 | |

黄色の大地の女神を鎮める

サセール・カンリⅣ (7,364m) 登頂

インド海軍中佐 サティヤブラタ・ダム

(ウッパルたい子訳、編集部修正)

私はクラール陸軍準将が率いるインド・英国合同隊が、1987年に一度だけ登頂に成功した「不可能」と表現されたⅣ峰南西稜からサセール・カンリⅠ峰に挑戦する夢を長い間抱いていた。これまで多くの登山隊が南西稜からⅠ峰に挑戦したが、全てⅠ峰とⅣ峰のコルにさえ到達出来なかった。我々はチョモランマ登山の前にそのルートからサセール・カンリⅠ峰に挑戦することにした。

2003年8月25日、インド海軍チームはデリーを出発し、陸路チャンディガル空軍基地に向かい、そこから空軍機IL76に搭乗し、26日の朝7時半頃、レーに着陸した。続く三日間は観光を兼ねて高所順応を行い、30日、ロードヘッドのパナミックに移動した。

8月31日、ベース・キャンプ(BC)へのルート工作と荷揚げを開始した。プクポチェ・ルンパ川の左岸に行く。所要所に固定ロープを張った。高度4,000m付近に狭いゴルジュ帯があり、その通過は慎重にならざるを得なかった。滑落すればプクポチェ・ルンパへ一直線に落ちて行く。その最後でポーターの一人が足を滑らせ、間一髪で他のポーターに助けられたが、貴重な荷物は川へ落ちてしまった。5時間で標高4,750m地点の草原に着きBC予定地とした。

9月4日、BCを設営し翌日からABCへのルート工作を開始した。中央プクポチェ・ルンパ氷河に入るとプラトナー・ピーク(7,310m)が大きく見え、氷河上の5,100m地点付近からはサセール・カンリ山群の西面の全貌を見渡すことが出来た。青空の中に雪に映えキラキラと輝く西面の光景は、本登山中最も印象に残るものであったが、同時に南西稜も威圧的に迫って来た。氷河の中、標高約

5,360m地点にABCを建設した。

8日、ABCに入るとすぐにブリザードに襲われた。一晩中雪が降り続き気温は零度以下となった。翌朝、雪と雲に覆われ南西稜の下部とアイスフォールだけが見えた。しかし、ブリザードの中、さらに前進すると今度はこれまでにみたことのないようなクレバス帯にぶつかった。旗竿が氷河を横断する安全な登路を示すのに役立った。時折南西稜やⅣ峰から途方もなく大きな雪崩が発生した。クレバス帯のスノーブリッジを渡り、数多くのステップを切って、5,800m地点で南西稜の取り付き地点によりやく辿り着いた。夜間の気温はマイナス14度まで下がった。10日から二日間は悪天候の中、荷揚げを続け12日、1987年隊のキャンプ地に到着しC1(5,880m)とした。

13日、ルートはⅣ峰から南西に派生している稜に求め、南西稜へのルート工作に出発。40度の氷壁にルートを開いたが、やがて雪となった。10ピッチ登ると南西稜の露岩に古いロープが残っていた。氷壁は60度となりほとんど爪先で立っていた。それでも13本の固定ロープを張って南西稜の岩の下



▲Ⅳ峰南西稜上のルート工作



が鋭い頂きを見せていた。ロックバンドは、岩壁、氷壁が連続し、その上に雪が張り付き最悪の状態であった。標高7,000m地点にC2を設営し、私たち二人はIV峰とI峰のコルのルート偵察に出た。C2から上はクレバスが横たわっていた。しかし、肝心のI峰の上部は見る事が出来なかった。

21日、C2上のクレバス帯を登る。前途は複雑なクレバス帯となっていた。1987年以後の登山隊が敗退した理由はこのクレバス帯にあったのだ。このプラトーには87年には存在しなかったクレバス帯が出現したのだ。ここを突破するには多くの装備と時間が必要なが分かった。我々はそれでも努力して7,300m地点に到達した。雪が柔らかく腰まで潜った。日中も気温はマイナス20度まで下がり夜は30度となった。



▲ C1からみたI峰南西壁

22日、アミット、バノー、ラジ・クマール、サンゲは、午前5時に出発し、4時間後にIV峰に登頂した。私はウルゲンとC2にいて、その朝パンチチュリIII峰で9名の登山家とシェルパが雪崩で亡くなった大遭難事故をラジオで聞いた。この事故でウルゲンの兄を含む我々のシェルパ3名の親族が亡くなった。死亡者の多くは私が以前共に登山したことのある親しい友人たちであった。この登山隊はインドチベット国境警察隊であった。即座に3名のシェルパをダージリンに帰さなければならなかった。このことは今回の登山の重大なことであった。この時点で我々のI峰への運は尽き、頂上を目指すためには別の機会を待つしかなかった。ウルゲンと登頂者はC1へ下り、私はIV峰に登るためにC2に残った。

23日、真夜中にベマと二人でC2を出発。気温はマイナス38度まで下がった。午前5時過ぎ二人はIV峰の頂上に立った。我々はIV峰の頂上からコルまで直接下り、C2からコルに拓いたルートよりもクレバスが非常に少ないことを確認した。連日の悪天候と冬の訪れはI峰攻略の勝算が全く無いことを意味していた。私とサムギャル、ベマはC1へ下りたが、IV峰登頂を目指すバラジ隊はC2へ登って行き、我々と行き違いになった。C1に下りると天候はますます悪化した。

ロックバンドを経てバラジ隊が無事にC1へ

▼IV峰頂上と背景はプラトー・ピーク



下ることが当面の課題となった。バラジューはC2が地獄のような状態であると下降に同意した。彼等は荒れ狂うブリザートの中、固定ロープを頼りに手探りで下降した。

24日、午後3時半遂に全員がABCに集結した。文字通り、雪と風に追われるように、25日我々はBCに帰着した。

登山隊メンバー

1. 隊長：サティヤブラタ・ダム(38) [IV峰登頂]
2. 副隊長：アミット・パンデ(29) [IV峰登頂]
3. 隊員：アビシェク・カンカン(32) 海軍中将
4. 隊員：K S. バラジュー(33) 海軍少佐
5. 隊員：バイキング・バノー(27) [軍医少佐]
6. 隊員：V S. プラバガー(29)
7. 隊員：ラジ・クマール(36) [海軍少佐]
8. 隊員：カンナ(32)
9. 隊員：ラケーシ・クマール(30)

シェルパ

1. サンゲ・プリー(34) [IV峰登頂]
2. サムギャル(35)
3. アング・タシー(30)
4. ニム・ドルジェ(24)
5. ダワ(32)
6. ウルゲン(34)
7. ペマ・ノルブ(38) [IV峰登頂]

登山隊記録

2003年

8月23日 ニューデリー発

▼IV峰



- 30日 バナミク到着 (3,300m)
- 9月4日 BC設営 (4,750m)
- 8日 ABC設営 (5,360m)
- 12日 C1設営 (5,880m)
- 20日 C2設営 (7,000m)
- 22日 アミット・パンデ、バイキング・バノー、ラジ・クマール、サンゲ・プリーが IV峰登頂。
- 23日 サティヤブラタ・ダム、ペマ・ノルブがIV峰登頂。

(訳者の文を編集部で若干手直した)

サセール・カンリ山群登山小史

- 1945 ロバーツがブクポチェ氷河から周辺を偵察。ルックアウト・ピーク(6,252m)に登頂。
- 1956 インド、ジャヤール隊が南ブクポチェ氷河からI峰の登頂を断念した後、サカン氷河に転進、サカン・ピーク(6,943m)に初登頂。
- 1970 インド、バフグナ隊が北ブクポチェ氷河に入り、6,140m、6,187m、6,553m、6,858mの無名峰に登頂した。
- 1973 インド、J. シン隊が北シュクバ・クンチャン氷河に入り6月5日、I峰の初登頂に成功した。
- 1979 インド、M. シン隊がI峰の登頂に成功。
- 1985 インド&H A J 合同登山隊がサカン氷河からII峰西峰(7,518m)の初登頂に成功した。
- 1986 インド、チャモリ隊が北シュクバ・クンチャン氷河からIII峰(7,495m)の初登頂に成功。
- 1987 インド&英合同隊がブクポチェ氷河から6月25日I峰の登頂に成功し、6日には英の二人パーティがIV峰の初登頂に成功した。

初めてのネパール

金川美代子

はじめに

2004年4月から、ネパールのアンナプルナ山群2週間とエベレスト山群3週間のトレッキングに出かけた。私のネパール初体験だった。

ネパールではごく当たり前の様に8,000m級の山々が存在している。山は鋭くとがり、谷は深く、その立体感を見たこともない陰影を作り出している。それらは「これでもか!」と言わんばかりに私を囲み迫ってきた。

そんなネパールの山での毎日は、トレッキングで満たされた幸せな日々だった。美しい風景は言葉で表現しきれないし、地元の人たちとの楽しい触れあいは語りつくせない。その中でも、ネパール初心者私にとって印象的だったことや、衝撃的だったことについて書いてみようと思う。

旧正月

トレッキング中、アンナプルナ山域の旧正月(4月14日)を体験することができた。昼間は、「A happy new year」と声を掛けるぐらいで普段通りの生活だったが、夜になるとロッジに民族衣装を着た地元の若者達が集まり、歌とダンスを披露してくれた。沖縄民謡のリズムに良く似たその歌やダンスは、間違えたり止まってしまうたりと、素人の域を出ないものであった。しかし、みんなが楽しそうに歌い踊り、そして笑っている。私が今まで見たどんな歌とダンスよりも温もりがあって、心に響くものだった。

川で洗濯

トレッキング中の洗濯は、水場か川ですることになる。もちろん手洗い。ある日、川で洗濯しようとする、ガイドが「オレがしてあげる。手洗いしたことないでしょ?家では便利な洗濯機を使っているのでしょ?俺は洗濯が上手いんだ」と、半ば強引に私の洗濯物を洗い始めた。その手つき

は無駄がなく丁寧で素晴らしかった。そして、「色物は別に洗うのさ」と、私がネパールで買った緑色のTシャツを他のものと分けて洗いだした。ネパール製のTシャツは見る見る色が落ち、川の水の色を一瞬緑に染めた。

川で洗濯…。桃は流れて来なかったが、桃太郎の世界だなと思った。

ホットシャワー

多くのロッジには「ホットシャワー(Hot Shower)」の施設がある。トレッキング中、私も何度か利用させてもらった。

ホットシャワーの質は、ロッジにより雲泥の差がある。太陽光発電で快適な温度の所もあれば、やかんで沸かしたお湯をバケツに入れて出すところもあった。ホットシャワーと謳っていても水しかでないことも度々あった。

一番困ったのは、体を洗っている最中に水が出なくなることだった。そんな時はタオルで体を拭き、なんとか泡を落とす。だから、シャワーを浴びる時は、途中で水が止まらないかドキドキしながら手早く浴びた。最後までお湯が出れば、それは最高のシャワータイム。全て流し終わった時点で「ほっと」一息する。これこそネパールの「ホット」シャワーだった。

ネパリピザ

ロッジでの食事は、自分の好きな物を豊富なメニューの中から自由に選ぶことができる。日本の山小屋ではありえないことだ。

ある日、お昼にベジタブルピザを頼んだ。ロッジのおばさんは「OK」と言った後、なぜか外へ出て行ってしまった。ほどなく野草を片手に戻ってくると、キッチンからバンバンゴロゴロという音がしてきた。そして、ピザを注文してから30分程経過し、やっとピザが運ばれてきた。ピザには

さっきおばさんが持っていたと思われる野草がトッピングとしてのっていた。

おばさんは、ピザの注文を受けてから、畑に材料を取りに行き、生地を練り、ピザを焼いたのだ(正しく言うと、鍋で蒸した蒸しピザだったが)。注文を受けてから生地を練るなんて日本では冗談のような話だ。

そのピザは、材料も生地も出来たてホヤホヤでとてもおいしかった。

マニ車のおばちゃん

ネパールの寺は、マニ車がぎっしり並ぶ外壁で囲まれている。マニ車を一回まわせばお経を一回読んだことになる。信者は朝に夕に、マニ車をまわしながら寺を何周もするそうだ。

ある寺に行った時、民族衣装を着たかっぶくの良なおばちゃんがマニ車を回しながら寺の角からゆっくりと歩いてきた。おばちゃんは、私達に気付くとやさしく微笑み、「どこから来たの?」「どこまで行くの?」と声をかけてきた。私達はジェスチャーをまじえ、そのおばちゃんと楽しく話をした。しばらくすると、おばちゃんは笑顔のまま、しかし無言で、ふところから沢山の絵ハガキをおもむろに取り出し私達の前に広げた。そのハガキは、ヒマラヤの人々の様子を描いた珍しいハガキだった。私達は、おばちゃんと少し仲良くなったし、ハガキも気に入ったので2枚ずつ買うことにした。

その後、おばちゃんと一緒に寺を一周した。私が「今日は何時からお寺をまわっているの?」と聞くと、おばちゃんは「家から見ていて、このお寺にあなた達が来たから出てきたのだよ」と、私の肩を叩き、笑いながら話してくれた。いかにも何周もしていたという面持ちで寺の角から出てきたおばちゃん。私達はまんまとおばちゃんの販売戦略に乗せられてしまったわけだ。でもなぜか悪い気はしない。自分の戦略を相手に正直に話してしまうおばちゃんの人の良さで、それに乗ってしまった自分達に、みんなで大笑いをした。

ロキシー

トレッキング最終日に泊まったロッジでは、ネ

パールの家庭酒「ロキシー」を造っていた。ロッジのおばさんは、ロキシー作りの見学や試飲をさせてくれた。しかし、試飲にも関わらずグラス一杯並々と注いでくれる。「気前良いなあ」と思いながら2〜3口味見をすると、またすぐ減った分だけグラスに並々と注いでくれる。おばさんは満面の笑みだ。ロキシーは焼酎に似た味で、アルコール度は30とも40度とも言われる酒である。私は少し引きつった笑みをおばさんへ返して、断ろうとするが効力はない。またすぐ注いでくれる。手でグラスに蓋をしてもだめだ。すきを狙って、天使の様な悪魔の様な悪戯っぽい笑みで注いでしまう。そんなやりとりが続き私の顔が赤くなった頃、試飲会はトレッキング最終日の打ち上げパーティーに変わっていた。気が付けばどこからか人が大勢集まってきて、みんなでダンスを踊りまくっている。おばちゃんも「ヒヒヒィー」と例の笑みで腰の入ったダンスを披露してくれた。ロキシーは地元の人には貴重なもののはず。通りすがりのトレッカーの私達におしげもなく振舞ってくれた。注ぎ上手でダンス上手なネパールの人達と楽しく過ごしたトレッキング最後の夜だった。

マオイスト

ブーンヒルには朝日を見るために沢山のトレッカーが日の出にあわせ登頂する。私達もブーンヒルに登り素晴らしい朝日と山々を見る事ができた。その帰り道、登山道にトレッカーの行列が出来ていた。何事かと思うと、噂に聞いていたマオイストの交通料徴収が行われていた。マオイストは立憲君主制の廃止、共和制の確立を標榜する反政府組織である。爆破事件やゼネストを起こしたりして最近ネパールで活動が活発化している。しかし、外国人ツアーリストに対しては、抵抗しなければほとんど危害は加えてこない。そのかわり、「交通料」等と称し活動資金としてのお金を巻き上げている。

マオイストは3人。武器は持っていないし軍服も着ていない。一見、少し貧しい感じさえる普通のネパール人だ。「私達のスローガン」と、つたない英語で書かれたファイルを読まされる。体が大きくて強そうな欧米人も、弱そうなマオイス

トに抵抗することなくマオイストの指示に従っていた。マオイストは「学割もあるよ」と笑顔交じりでトレッカーにインフォメーションしている。最後には、一人一人へ領収書を発行し「have a nice trekking! 良い旅を!」と私達を送り出した。マオイストの活動を理解することはできないけれど、ネパールの複雑な実情を知るうえで貴重な体験だった。

文化と伝統

ネパールの山では、歩いていると1時間ぐらいの間隔で小さな村が現れる。村の人は、段々畑の開墾や、家畜の放牧、トレッカー向けのロッジや売店の経営をして生計をたてている。暮らしは裕福ではないが、とても素朴でのんびりとしていた。晴れた日には夫婦で膝枕をして昼寝をしたり、家族でトランプをしたり、孫と祖母とが散歩したりして過ごしていた。そんな彼らの生活の中には、日本やネパールの都市部ではみられない独特の文化・伝統があった。例えば、女性が着ている民族衣装や部族によって異なる歌やダンス。神への信仰。ほかにも冠婚葬祭にまつわる文化・伝統が沢山あった。それらは独特でとても興味深かった。

そんな村を歩いていると、子供から物乞いをうけることが度々あった。彼らは「Hello, please sweet」「Give me sweet」と手を出して話しかけてくる。ある時には、私の汗でぬれた汚いタオルまで取ろうとする。ネパールのかわいい子供たちにお菓子をあげたいのは山々だが、私には、彼らへの対応に戸惑いと迷いを覚えた。それは今回の旅行中の大きな悩みの一つだった。しかし、そんな時はある山寺のパンフレットを思い出すようにした。それには「物乞いには対応せず、現地の人と対等な立場で接してください。文化・伝統を尊重して下さい」と書かれていた。

トレッカーは最先端の器具やおいしい食べ物を沢山持っている。それらを彼らに与えることで、彼らの生活を変えてしまう恐れがあるだろう。昔から、彼らはトレッカー相手のガイドやポーター等で多くの仕事や収入を得ているのも事実だ。しかし、私達トレッカーが土足の侵入を続けると、文化や伝統の衰退につながる事も考えられる。私

達トレッカーは、ネパールの伝統的な村に大きな影響を及ぼしかねない侵入者ともいえる。

ある村には、Protect our culture and tradition という標語が張ってあった。これは、現地の人に向けて書かれただけではなく、私達トレッカーにも向けられている気がした。ネパールの山村の文化と伝統を守るためには、私達もそれに協力できるような登り方をしなくてはならないと思った。

エベレストが運ぶ幸せ

私が初めてエベレストの雄姿を見たのは、ナムチェのビジターセンターからだった。

その日のエベレストは、前日の降雪の為に白く染まり夕暮れの空に良く映えた。エベレストの頭が少し見えるだけだったが、私は初めてエベレストを肉眼で見たいうれしさで一杯になった。笑ったり涙が出そうになったり、拜んでみたり…。

夕暮れ時のビジターセンターには、エベレストを見ようとする人々が次々と登っていた。少し落ち着いた私は、一時エベレストを眺めるのを止めて、エベレストを見ている人達の様子を観察することにした。感激で大声をあげる人、笑顔の人、半泣きの人…、人それぞれ表現は違うけれど、みんなの目はキラキラ輝き生き生きとしていた。私はその人達の様子をみているだけでまたさらに幸せな気持ちになった。エベレストは、その存在だけで大勢の人々に幸せを運んでくれるすごいパワーを持った山だった。

最後に

長々と、取りとめのない文章を書いてしまった。この様に、私のネパール初体験は、ネパールの偉大な山々から感銘を受けたばかりでなく、ネパール人の人情や生活からも大きな衝撃や感動を受けた。

私にとってネパールは奥深く魅力的な国だ。ネパールをもっと良く理解するためにも、必ず再訪したいと思っている。

(奥多摩山岳会会員)

地域ニュース

《パキスタン》

スパンティーク(7,029m)に初登攀

同人パハールが派遣した登山隊(平出和也隊長(25)ら3名)は、6月25日、4,550m地点にBCを設営。北西稜にルートを探り、30日、約5,500mのC1へ移動。7月8日、飛田和夫(58)隊員を含め3名で北西稜を抜け、6,200m地点にC2を設営した。9日、隊長と谷口けい(31)が登頂に成功し、帰路ホワイトアウトに苦しんだがC2へ帰着。10日、BCへ下った。

《ネパール》

ネパール観光都市のポカラ市長暗殺、毛派?銃撃

ネパールからの報道によると、同国中部の観光都市ポカラで2日、ハルカ・バサドゥル・グルング市長の乗った車が3人組の銃撃を受け、市長が死亡、ボディガードと運転手が重傷を負った。

王政廃止を求める武装勢力・ネパール共産党毛沢東主義派の仕業とみられる。毛派は市長殺害を予告していた。AFP通信によると、市長らが繁華街を通過中、一般市民を装った男が車をとめ、市長に握手を求めるふりをして銃撃。隠れていた男2人も車に向けて発砲したという。

ヒマラヤの眺めが美しいポカラは、トレッキングの拠点として知られ、日本人観光客にも人気がある。

《中国》

ヒマラヤの未踏峰に挑む学術登山隊の壮行会開く

今夏、ヒマラヤ山脈の未踏峰に挑む「西チベット学術登山隊2004」(9人、大西保隊長)の壮行会が6日、大阪市内で行われ、隊員たちは「新しい歴史を刻みたい」と決意を述べた。

登頂を計画しているのは、チベット自治区のパチュムナム(6,529m)とギャンゾンカン(6,080m)。約100年前、大阪府堺市出身の僧、河口慧海(えかい)師が日本人として、初めてヒマラヤ山脈を

抜けた際の目標とされており、師の足跡調査も行う。

壮行会には、登山を企画した日本山岳会関西支部(大阪市東成区)のメンバーら35人が出席、隊員は富士山などで高地訓練を重ねており、「準備は順調」と報告。「安全に心掛けて挑戦してほしい」と激励を受けた。今月下旬に第一陣が出発。9月から10月にかけての登頂を目指す。

《キルギス》

キルギスの山岳で遭難した邦人18人を救出

インターファクス通信によると、中央アジア・キルギスの非常事態省救援チームは6日、同国南部の山岳地帯で、日本人18人のグループを無事救出した。

AFP通信によると、邦人グループは、中国との国境地帯の天山山脈の渓谷で、川にかかる橋が増水で流されたため、2日間動きが取れなくなっていた。キルギスには高山が多く、近年、登山観光が盛んになっている。

トピックス

山岳4団体三役懇談会開催される

7月9日(金)恒例となった日山協、労山、JAC、HAJの山岳4団体の三役懇談会が東池袋の「かんぽヘルスプラザ東京」で開催された。本年の幹事団体であるHAJ酒井國光会長の挨拶の後、懇談に入り、その後各団体から事業報告があり、下記のような具体的な提案があった。

日山協

1. 富士山頂高所医科学センターの支援
2. 海外登山情報センター設立
3. 山岳4団体実務者懇談会常設

HAJ

1. 登山共済制度懇談会の発足
2. 高峰登山調査用紙統一の件について広告出稿

出席者

[日山協] 大森薫雄副会長、八木原絬明専務理事、

(オブザーバー堀井昌子)

[芳 山] 斎藤義孝理事長、副理事長(香取純、後藤功一、野口信彦)

[J A C] 平林克敏副会長、藤本慶光常務理事、贅田統亜理事、内田博監事

[H A J] 酒井國光会長、山森欣一理事長、尾形好雄常務理事、中岡久監事

印パ、カシミール問題で共同声明発表へ

インドのシャシャンク、パキスタンのコカル両外務次官は28日、前日に続いて、最大の懸案であるカシミール地方の領有権問題などを中心に協議した。

両国がカシミール問題を主要議題に協議を行うのは2001年のバジパイ・インド首相(当時)とムシャラフ・パキスタン大統領との首脳会談以来。両国は協議終了後に共同声明を発表する見通しだ。

協議では、パキスタン側カシミールから相次ぐイスラム過激派の越境とテロ対策や、実効支配線(停戦ライン)などでの両国軍の兵力削減などを検討。同問題の協議にカシミールの地元代表を参加させるかどうかなどについても意見を交換したと見られる。

共同声明では、前日に協議されたムンバイ(インド)とカラチ(パキスタン)の領事館再開など広範な信頼醸成措置の合意が盛り込まれるとみられる。

カシミール地方はヒマラヤ山脈につらなる約22万平方キロの地域で、現在インドが約45%、パキスタンが約35%、中国が約20%を領有。同地方をめぐり、インドとパキスタンは過去2回戦争になった。

故・野沢井歩一周忌について

H A J 野沢井歩前専務理事の一周忌が下記のとおり執り行なわれる。参列ご希望の方は8月20日までにH A J 事務局へ連絡下さい。

記

1. 日時：9月5日(日)午前11時
2. 場所：セレモニア富士水戸駅南館(昨年の葬儀と同じ場所：水戸市桜川2-5-11 JR水戸駅南口 電話：029-241-6595)
3. 終了後同所にて野沢井家の精進落としがあります。

Books**聖地巡礼**

2001年秋、ネパール、ダウラギリ I (8,167m) 東壁にアルパイン・スタイルで果敢に挑戦し、品川幸彦、福本誠志と共に消息を絶った星野龍史(33)の「絵画」の作品集である。高校を卒業後、登山実践と共に美術専門学校に2年間通った。本作品集に収録されたのは、ヒマラヤ登山の都度書き溜めた物が中心となっている。その一部については既に山田昇の遺稿追悼集の「白き山河の旅人」のカットとして使用され好評を博している。(山) 29cm×28cm 72頁 上製本 2,500円+送料380円 [問い合わせ先] 〒373-0831群馬県太田市福沢町264-2メルベージュ B 202 寺田勉 Ⅷ090-1530-0591 E-mail: terachan@sweet.ocn.ne.jp

神戸大学東チベット学術登山隊報告書

2003年秋、神戸大学が今、最も注目を浴びている東チベットのカンリ・ガルボ山群の主峰ルオニイ(6,805m)に挑戦した記録。前年の偵察の結果、北面から挑戦したが悪天のため登頂を断念した。H A J では2001年夏の登山許可を得て挑戦する予定であったが、他隊の横車を避けるため一年繰り上げて2000年夏に隊を組織したが、その年チベットは豪雨となり、B C への途中の道路が決壊し、入山を断念した経緯があった。(記：山森)

A 4判 74頁(内カラー6頁) [問い合わせ先] 〒615-8063 京都市西京区下津林六反田1-18 平井一正 Ⅷ 075-391-5294

■財政支援：〔5万円〕中川裕、〔3万円〕天城敏彦〔1万円〕出口當

東京集会のお知らせ

日時 8月30日(月)午後7時～
内容 パスーBC訪問団報告
場所 H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

日本隊によるヒマラヤ高峰初登頂

山森 欣一

1956年マナスルに初登頂して以来、ヒマラヤ登山における日本隊の活躍はめざましい。しかし49年も過ぎた現在では、一体どのような登山隊がどのような活躍をしたのか全貌もおぼろげになる。

ここでは、6,000メートル以上の峰に初登頂した隊を整理してみた。しかし、中には当事者が初登頂と発表しても部外者から物言いがついたケースもあり、私の独断で整理した。

主な 7,000メートル峰

(注) 派遣母体の※印は外国との合同隊

2003年12月31日現在

番号	年	山名	標高	登頂年月日	派遣母体
01	1956	マナスル(Manaslu)	8,163	1956. 5. 9	日本山岳会(JAC)
02	1958	チョゴリザ北東峰(Chogolisa NE)	7,654	1958. 8. 4	京都大学(AACK)
03	1960	ノシャック(Noshaq)	7,492	1960. 8.17	京都大学(AACK)
04	1960	ヒマルチュリ東峰(Himalchli E)	7,893	1960. 5.24	慶應大学(Keio U.)
05	1960	アピ(Api)	7,132	1960. 5.10	同志社大学(Doshisha U.)
06	1962	サルトロ・カンリ(Saltoro Kangri)	7,742	1962. 7.23	京都大学(AACK)※
07	1962	チャムラン(Chamlang)	7,319	1962. 5.31	北海道大学(Hokkaido U.)
08	1963	バルトロ・カンリⅢ(Baltoro KangriⅢ)	Ca.7,300	1963. 8. 4	東京大学(Tokyo U.)
09	1963	サイパル(Saipal)	7,031	1963.10.31	同志社大学(Doshisha U.)
10	1964	ギャチュン・カン(Gyachung Kang)	7,952	1964. 4.10	長野県山岳協会(Nagano M.A.)
11	1964	アンナプルナ南峰(Annapurna S)	7,219	1964.10.15	京都大学(AACK)
12	1964	タルケ・カン(Tarke Kang)	7,193	1964.10.16	千葉県山岳連盟(Chiba M.A.)
13	1965	ゴジュンバ・カンⅡ(Ngojumba KangⅡ)	7,646	1965. 4.23	明治大学(Meiji U.)
14	1967	ランガール・ゾム南東峰(Langhar Zom SE)	7,061	1967. 7.25	新潟大学(Nigata U.)
15	1967	サラグラール南峰(Saraghrar S)	7,308	1968. 8.24	一橋大学(Hitotsubashi U.)
16	1969	グルジャ・ヒマール(Gurja Himal)	7,193	1969.11. 1	富山ヒマラヤ登山隊(Toyama)
17	1970	ダウラギリⅥ(Dhaulagiri Ⅵ)	7,268	1970. 4.17	関西登高会(Kansai A.C.)
18	1970	ガディ・チュリ(Ngadi Chuli)	7,871	1970.10.19	大阪大学(Osaka U.)
19	1970	チューレン・ヒマール(Churen Himal W)	7,371	1970.10.28	静岡大学(Shizuoka U.)
20	1975	ダウラギリⅤ(Dhaulagiri Ⅴ)	7,618	1975. 5. 1	岡山大学(Okayama U.)
21	1975	ダウラギリⅣ(Dhaulagiri Ⅳ)	7,661	1975. 5. 9	大阪府山岳連盟(Osaka M.A.)
22	1975	カンピレ・ディオール(Kampire Dior)	7,168	1975. 7.14	広島山の会(Hiroshima Yamano Kai)
23	1975	マルビディン中央峰(Malubiting C)	7,260	1975. 8. 2	日本山岳会岩手(JAC. Iwate)
24	1975	K12	7,469	1975. 8. 4	市川山岳会(Ichikawa A.C.)
25	1975	テラム・カンリⅠ(Teram Kangri Ⅰ)	7,464	1975. 8.10	静岡大学(Shizuoka U.)
26	1976	アプサラサスⅠ(Apsarasas Ⅰ)	7,245	1976. 8. 7	大阪大学(Osaka U.)
27	1976	シンギ・カンリ(Singhi Kangri)	7,202	1976. 8. 8	東北大学(Tohoku U.)
28	1976	シェルピ・カンリ(Sherpi Kangri)	7,303	1976. 8.10	神戸大学(Kobe U.)
29	1976	スキャン・カンリ(Skyang Kangri)	7,357	1976. 8.11	学習院大学(Gakushuuin U.)
30	1977	ヌプツェ北西峰(Nuptse NW)	7,742	1977. 5.11	登歩溪流会(Toho Keiryu Kai)

番号	年	山名	標高	登頂年月日	派遣母体
31	1977	ウドレンゾム中央峰(Udren Zom C)	7,080	1977. 8.10	茨城大学(Ibaraki U.)
32	1978	ヒマルチュリ西峰(Himalchuli W)	7,540	1978. 5. 7	雪と岩の会(Yukitoiwano kai)
33	1978	バトゥラⅢ(Batura Ⅲ)	7,729	1978. 7. 6	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
34	1978	パス東峰(Pasu E)	7,295	1978. 7. 2	防衛大学校(Self Defense C.)※
35	1978	ガネッシュ・ヒマールⅣ(Ganesh Himal Ⅳ)	7,110	1978.10.20	日本勤労者山岳連盟(JWAF)※
36	1979	ランタン・リルン(Langtang Lirung)	7,225	1978.10.24	大阪市立大学(Osaka City U.)※
37	1979	クンヤン・チッシュ北(Kunyang Chhish N)	7,108	1979. 7.11	北海道大学(Hokkaido U.)
38	1979	プマリ・チッシュ(Pumari Chhish)	7,492	1979. 7.15	北海道山岳連盟(Hokkaido M.A.)
39	1979	ラトックⅠ(Latok Ⅰ)	7,145	1979. 7.19	京都カラコルムクラブ(Kyoto)
40	1979	テラム・カンリⅢ(Teram Kangri Ⅲ)	7,382	1979. 8. 4	弘前大学(Hirosaki U.)
41	1979	ルプガル・サル中央(Lupghar Sar C)	Ca.7,200	1979. 8. 4	法政大学Ⅱ(Hosei U.Ⅱ)
42	1980	ガネッシュ・ヒマールⅢ(Ganesh Ⅲ)	7,052	1979.10.19	岡山大学(Okayama U.)※
43	1981	ジュトマル・サル(Yutomaru Sar)	7,330	1980. 7.22	東京志岳会(Tokyo Shigaku Kai)
44	1982	ランタン・リ(Latang Ri)	7,205	1981.10.10	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
45	1982	カンベンチン(Kangpenchin)	7,281	1982. 4.21	京都大学(AACK)
46	1982	ポーロン・リ(Porong Ri)	7,292	1982. 5.17	大分県山岳連盟(Oita M.A.)
47	1983	ハチンダール・キッシュ(Hachindar Chish)	7,163	1982. 8. 4	金沢大学(Kanazawa U.)
48	1984	ネムジュン(Nemjung)	7,139	1983.10.27	弘前大学(Hirosaki U.)※
49	1984	サトバント西峰(Satopanth W)	7,045	1983. 5	日本(Japan)
50	1984	ウルタルⅠ(Ultal Ⅰ)	7,329	1984. 7.28	広島山岳会(Hiroshima A.C.)
51	1984	マモストーン・カンリ(Mamostong Kangri)	7,526	1984. 9.13	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
52	1985	ナムナニ(Naimona'nyi)	7,694	1985. 5.26	京大(AACK)／同大(Doshisha U.)※
53	1986	マラグッテイ・サル(Malangutti Sar)	7,026	1985. 8.13	東京志岳会(Tokyo Shigaku Kai)
54	1986	クーラ・カンリⅠ(Khula Kangri Ⅰ)	7,538	1986. 4.21	神戸大学(Kobe U.)
55	1986	ニェンチェンタラ(Nyaiqentanglha M)	7,162	1986. 5. 8	東北大学(Tohoku U.)
56	1986	pt.7167(Kun Lun Range)	7,167	1986. 8.16	東京農業大学(Tokyo Agri.U.)
57	1986	チョー・アウイ(Qowoyat)	7,354	1986.10.12	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
58	1986	カルジャン北(Karjiang N)	7,216	1986.10.14	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
59	1986	ギャラ・ペリ(Gyala Peri)	7,294	1986.10.31	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
60	1987	ラブチュ・カン主峰(Labuche Kang M)	7,367	1987.10.26	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
61	1988	カント(Kangto)	7,055	1988. 3.24	同志社大学(Doshisha U.)
62	1988	リモⅠ(Rimo Ⅰ)	7,385	1988. 7.28	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
63	1989	スークァン・リ(Siguang Ri)	7,308	1989. 4.21	大阪市立大学(Osaka City U.)
64	1992	ヒムルン・ヒマール(Himlung Himal)	7,126	1992.10. 3	北海道大学(Hokkaido U.)
65	1992	ナムチャ・バルワ(Namjag Barwa)	7,782	1992.10.30	日本山岳会(JAC.)※
66	1993	ピラミッド・ピーク主峰(Pyramid Peak M)	7,123	1993. 4.24	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
67	1993	クラウン(Crown)	7,295	1993. 7.22	日本山岳会・東海(JAC. Tokai)
68	1994	アク・タシ(Aq Tash)	7,016	1993. 8. 6	広島山岳会(Hiroshima A.C.)※
69	1994	チリン(Ciring)	7,038	1994. 7.19	岐阜大学(Gifu U.)
70	1994	ギャジ・カン(Gyajji Kang)	7,038	1994.10. 7	信州大学(Shinsyu U.)※

番号	年	山名	標高	登頂年月日	派遣母体
71	1994	トゥインズ(Twins)	7,350	1994.10.31	日本登山隊(Japan)
72	1995	マナ北西峰(Mana NW)	7,092	1995. 8.18	山形海外(Yamagata)※
73	1995	ニエンチェンタンラ南東峰(Nyaingcentanglla SE)	7,046	1995. 8.22	中津川労山(Nakatsugawa)
74	1996	ウルタルⅡ(UltaⅡ)	7,388	1996. 7.11	日本山岳会東海(JAC)
75	1996	ラトナチュリ(Ratnachuli)	7,035	1996.10.14	信州大学(Shinsyu U.)※
76	1998	カンペンチン北峰(Kangpenchin N)	7,230	1998. 8.31	愛媛大学(Ehime U.)
77	1999	リャンカンカンリ(Lyankagkangri)	7,535	1999. 5. 9	日本登山隊(Japan)
78	2001	クーラ・カンリⅡ(Khula Kangri Ⅱ)	7,418	2001. 5. 2	東海大学(Tokai U.)※
79	2001	クーラ・カンリⅢ(Khula Kangri Ⅲ)	7,381	2001. 5. 4	東海大学(Tokai U.)※
80	2002	パドマナブ(Padmanabh)	7,030	2002. 6.25	日本山岳会(JAC)※
81	2003	フンチ(Hungchi)	7,036	2003. 4.19	大阪鋭峰会(Osaka Eiho Kai)

主な 6,000メートル峰

(注) 派遣母体の※印は外国との合同隊

2003年12月31日現在

山名	標高	登頂年月日	派遣母体
[ブータン・ヒマラヤ]			
マサ・カン(Masa Kang)	6,800	1985.10.13	京都大学(AACK)
[ネパール・ヒマラヤ]			
オンミ・カンリ(Ohnmi Kangri)	6,829	1982. 4.29	東京都庁(Tokyotocyo A.C.)
ヌプチュー(Nupchu)	6,418	1962. 5.20	大阪府立大学(Osakafu U.)
シャルプー(Sharpu)	6,410	1963.10.22	大阪府立大学(Osakafu U.)/ 東京都立大学(Tokyo U.)
コンデ・リ(Kongde Ri)	6,187	1978.11. 1	慶大アルペン(Keiou Alp)
ヌンブール(Numbur)	6,957	1963. 5.29	千葉大学(Chiba U.)
カータン(Khatang)	6,782	1982.11. 1	北海道中央労山(JWAF. H)
カリョオルン(Karyolung)	6,511	1982.10.31	兵庫県労山(JWAF. Hiyogo)※
テンギ・ラギ・タウ(Tengi Ragi Tau)	6,943	2002.12. 4	北海道山岳連盟(Hokkaido M.A.)
プルビ・チャチュ(Phurbi Chyachu)	6,637	1982. 4. 3	大阪労山(JWAF. Osaka)※
レンボ・ガン(Lenpo Gang)	6,979	1962. 5. 3	全日本岳連(AJMA)
ドルジュ・ラクパ(Dorje Lhakpa)	6,966	1981.10.18	法政大学Ⅱ(Hosei U.Ⅱ)※
ランシサ・リ(Langshisa Ri)	6,427	1982. 4.23	名古屋大学(Nagoya U.)
シャルバチュム(Shalbachum)	6,918	1959.10.25	飯田山岳会(Iida A.C.)
ガネッシュ・ヒマールⅤ(Gansh Himal Ⅴ)	6,816	1980. 4.21	東京慈恵医大(Jikei U.)※
バウダ・ピーク(Baudha Peak)	6,672	1970. 5. 2	慶應大学(keio U.)
チェオ・ヒマール(Cheo Himal)	6,820	1991.10.13	いまり山岳会(Imari A.C.)※
ハムジュンガル・ヒマール(Khamjungar Himal)	6,758	1982. 5.25	日本ヒマラヤ協会(HAJ)※
ニルギリ南峰(Nilgiri S)	6,839	1978.10.10	信州大学(Shinsyu U.)
ニルギリ中央峰(Nilgiri C)	6,940	1979. 4.30	松山大学(Matsuyama U.)
ホングデ(Hongde)	6,556	1962. 5. 8	日本大学(Nippon U.)

山名	標高	登頂年月日	派遣母体
シタ・チュチュラ(Sita Chuchula)	6,611	1970.10.26	日本大学(Nippon U.)
カンジェラルワ(Kanjeralwa)	6,612	1973. 4.22	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
トリブラ・ヒウンチュリ(Tripura Hiunchuli)	6,553	1986.10.17	岡山大学(Okayama U.)
ツォカルポ・カン(Tsokarpo Kang)	6,556	1971.10.25	大阪府山岳連盟(Osaka M.A.)
カンジロバ主峰(Kanjiroba M)	6,883	1970.11. 7	大阪市立大学(Osakashi U.)
ビジョラ・ヒウンチュリ(Bijora Hiunchuli)	6,386	1975. 4.27	山形大学(Yamagata U.)
ジェティ・ボフラニ(Jethi Bohurani)	6,850	1978. 4.27	信州大学(Shinsyu U.)
カンデ・ヒウンチュリ(Kande Hiunchuli)	6,627	1972.10.18	東京山旅倶楽部(Tokyo Yamatabi Club)
ビジョラ・ヒウンチュリ(Bijora Hiunchuli)	6,386	1975. 4.27	山形大学(Yamagata U.)
ナンパ(Nampa)	6,755	1972. 5. 5	青森県山岳連盟(Aomori M.A.)
ジェティ・ボフラニ(Jethi Bohurani)	6,850	1978. 4.27	信州大学(Shinsyu U.)
[インド・ヒマラヤ]			
ナンダ・コート(Nanda Kot)	6,861	1936.10. 5	立教大学(Rikkyo U.)
リシ・パハール(Rishi Pahar)	6,992	1975. 9.27	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
サーフ・ミナール(Saf Minal)	6,911	1975.10. 2	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
カランカ(Kalanka)	6,931	1975. 6. 3	上市峰窓会(Kamiichi A.C.)
メルー(Meru)	6,660	1980.10.10	東洋大学(Toyo U.)
バギラティ I (Bhagirathi I)	6,856	1980. 9.24	香川県勤労者山岳連盟(Kagawa)
インドラサン(Indrasan)	6,221	1962.10.13	京都大学(Kyoto U.)
バイハリジョット北峰(Baihalijot N)	6,290	2001. 6.13	長野労山(Nagano W)
ドダ(Doda)	6,550	1976. 9.20	東洋大学(Toyo U.)
チャウチャウカンニルダ	6,303	1997. 8. 7	群馬県高体連(Gunma)
Z 1	6,400	1980. 8.20	北海道大学(Hokkaido U.)
ウムドン・カンリ(Umdung Kangri)	6,643	1999. 8. 8	日本山岳会東海支部(JAC Tokai)
[カラコルム]			
ビアレ(Biale)	6,729	1977. 7.22	松山大学(Matsuyama U.)
ソスブン・ブラック(Sosbun Brakk)	6,413	1981. 7. 4	大阪紫岳会(Osakashigaku)
スカムリ(Skamri)	6,763	1979. 7.20	横浜山岳会(Yokohama A.C.)
ボビスギール(Bobisghir)	6,415	1985. 6. 7	日本大学山稜会(Nippon U.)
ラトックⅢ(Latok Ⅲ)	6,949	1979. 7.15	広島山の会(Hiroshima A.C.)
ラトックⅣ(Latok Ⅳ)	6,456	1980. 7.18	山学同志会(Sangakudoshi)
タフ・ルタム(Tahu Rutam)	6,651	1977. 7.13	大阪登攀倶楽部(Osaka A.C.)
サンゲ・マルマール(Sange Marmar)	6,949	1984. 7.11	大阪大学(Osaka U.)
コズ・サール(Koz Sar)	6,677	1999. 8.17	仙台一高山の会 (Sendai Ichiko Yamanokai)
プリアン・サール(Prian Sar)	6,293	1975. 8. 7	京都カラコルムクラブ (Kyoto Karakormu A.C.)
プルポー・ブラッカ(Prupoo Burakka)	6,870	1977. 7.14	鉄道同人(Tetsudo A.C.)
K 7	6,934	1984. 8. 3	東京大学(Tokyo U.)
ドラフェイ・カール(Drafey Khar)	6,444	1978. 8.17	北海道大学(Hokkaido U.)

山名	標高	登頂年月日	派遣母体
ビルチャール・ドバニ(Birchhar Dobani)	6,134	1979. 6. 9	登攀倶楽部京都(A.C. Kyoto)
ライラ(Laila)	6,985	1975. 8. 9	碧稜山岳会(Hekiriyo A.C.)
マンゴ・グソール(Mango Usor)	6,288	1980. 7. 2	京都岳人クラブ(Kyoto A.C.)
#チョンラ・ピーク(Chongra Peak)	6,824	1972. 8.21	岩峯登高会(Ganpo A.C.)
[ヒンドゥクシュ&ラジ]			
トゥイ I (Thui I)	6,660	1974. 7.27	雲表倶楽部(Unpyo A.C.)
シャハーン・ドク(Shahan Dok)	6,320	1988. 7.22	根深誠(Nebuka)
ルンコー・イ・ハワール(Lunkh i Hawar)	6,895	1967. 8. 5	鈴木/田中(Suzuki/Tanaka)
シャーズ(Shayaz)	6,050	1994. 7. 6	長崎北稜会(Nagasaki A.C.)
ノバイズノン・ゾム(Nohbaizonon Zom)	6,600	1967. 8. 4	一橋大学(Hitotsubashi U.)
ヤジュン・ピーク(Yajun Peak)	6,024	1967. 8. 3	広島大学(Hiroshima U.)
シャー・イ・アンジュマン(Sha i Anjuman)	6,026	1968. 7.17	大垣市(Ogaki City)
[中国領・ヒマラヤ]			
(チベット自治区・Tibet)			
ザンセル・カンリ(Zangser Kangri)	6,460	1990. 5.19	長野県山岳協会(Nagano M.A.)
カキュ・カンリ(Kaqur Kangri)	6,859	2002. 9.24	同志社大学(Doshisya U.)
チャンサンラム(Changsanglam)	6,324	1992. 5. 2	長野県山岳協会(Nagano M.A.)
サンデン・カンシャ(Sanding Kansha)	6,590	1992.10. 9	川上(Kawakami)
(四川&青海・Sichuan&Qinghai)			
アムネマチン(Anemaqin)	6,282	1981. 5.18	上越山岳協会(Jyoetsu M.A.)
スークーニャン(Siquniang)	6,250	1981. 7.28	同志社大学(Doshisya U.)
グラタンドン(Geladaindong)	6,621	1985. 8.15	青蔵研究会(Qinthan)
ゲニ(Genyen)	6,204	1988 .6.11	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
チェルー(Chola)	6,168	1989. 9.24	神戸大学(Kobe U.)
シンチン(Xinqin)	6,860	1992. 5.18	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
(新疆ウイグル自治区・Xinjiang)			
無名峰(Unnamed Peak)	6,903	1988. 8.22	京都大学(Kyoto U.)
チャクラギール(Chakragil)	6,727	1988. 9. 1	明治学院大学(Meijigakuin U.)
チョルパンリク・ムスターグ(Cholpanglik)	6,524	1989. 8.14	仙台一高(Sendaiichiko A.C.)
ムーシュ・ムスターグ(Mushu Muztagh)	6,638	1990. 8.18	栃木県高体連(Tochigi Hig)
シュエレン(Xuelian)	6,627	1990. 8.19	J A C 東海(JAC-Tokai)
コクセル(Koksel)	6,705	1993. 8.16	山形大学(Yamagata U.)
チャントック(Changtok)	6,972	1994. 7.28	岐阜大学(Gifu U.)
カシカール(Kaxkar)	6,342	1994. 8.12	瀬戸内(Setouchi)
無名峰(Unnamed Peak)	6,849	1995. 8. 9	J A C 青年部(JAC)
ギシリック・ターグ(Gishilik Tagh)	6,488	1995. 8.16	山形県山岳連盟(Yamagata M.A.)
ハーン・ヤイリク(Han Yailik)	6,744	1996. 8.	山岡人志(Yamaoka)
チョン・ムスターグ(Chion Muztagh)	6,962	2001. 8.15	早稲田大学(Waseda U.)
セリッククラム・ムスターグ(Selikkram)	6,691	2001. 8.12	信高山岳会(Shinko A.C.)

ダウラギリ I 入山者 [1970-2001=32年間]

(注) 派遣母体後ろの () 内は登山隊員+報道隊員等であるが、学術隊員、医師などは登山隊員とした。氏名の×印は、その登山で死亡したもの。

[1] 1970年秋

同志社大学 (14)

隊長：太田徳風(57)／隊員：今成征三(30)、川田哲二(30)、河野吏(30)、小川允巳(28)、川合康男(31)、西村誠男(28)、椎塚直人(29)、堀江礼二(28)、宮川清彦(27)、和田豊司(25)、石川博(22)、安井忠(21)、山辻英也(33)

[秋期初登頂を目指して北東稜に入山。9月6日、マヤンディ氷河上4,500mにBC設営。12日C1(5,000m)、17日C2(5,700m)、24日C3(6,300m)、10月4日C4(6,900m)と建設し、19日C5(7,400m)、AC(7,800m)建設し、29日、川田とラクパ・テンジンが秋期初登頂に成功し、60年隊に次いで第3登となった。]

[2] 1973年秋・偵察

東京都山岳連盟 (2)

隊長：高橋照(59)／隊員：高橋善教(28)

[南壁偵察のため11月9日、バキテ・コーラ出合の2,900mにBC設営。12日、高橋善とシェルパが4,800mに達し、C1予定地とした。]

[3] 1975年春

東京都山岳連盟 (17)

隊長：雨宮節(38)／隊員：小原和晴(34)、春日直道(33)、清水清二(29)、丸山隆司(29)、永沼勝己(29)、二宮勝男(29)、石川進(29)、田中基喜(26)、鹿島頼道(26)、加藤康二(26)、綾部昇(26)、×沼尾吉忠(25)、小林利明(25)、×井村哲(23)、高橋照(60)、竹村謙一(29)

[南稜の初登攀を目指して3月1日、3,460mに設営。C1(4,500m)、10日、5,250mにC2を建設し南稜に取り付く。18日、5,800m地点にC3を建設。しかし、25日深夜C1が雪崩に襲われ沼尾、井村とシェルパ3名が埋没死した。4月12日登山は再開され、18日、6,200mまで到達したが登頂を断念した。]

[4] 1977年秋

関西隊 (13)

隊長：塚崎義人(46)／隊員：高木稔(31)、浅見亨(33)、水田吉信(33)、松井道大(28)、大津幹夫(29)、八嶋道郎(29)、鍋島義雄(28)、一本松文夫(28)、松本正之(23)、岡本昇(29)、浜村恭治(24)、大崎健司(27)

[西壁からの初登攀を目指して入山。8月19日3,500mにBC設営。24日C1(4,400m)、27日C2(4,950m)、9月4日プチャール岩稜の取り付きにC3(5,300m)、17日C4(5,830m)、21日6,000m、23日6,250mに到達したが、24日、一本松が荷揚げ中に5,500mで落石を顔面に受け救助。30日登山を再開し、10月3日C5を6,270m、7日仮C6(6,550m)し、翌日6,700mに達したが登山を中止した。]

[5] 1978年春

イエティ同人 (13)

隊長：雨宮節(42)／隊員：清水清二(32)、平井拓雄(32)、×永沼勝己(33)、加藤康二(29)、小林利明(29)、吉野寛(28)、三上耕一(27)、平原泰則(28)、重野太肚二(31)、佐々木慶正(23)、前田光久(29)／加藤淑子(28)

[75年の雪辱戦として入山。3月20日、3,650mにBC設営。27日C1(5,250m)、4月7日C2(5,800m)、17日C3(6,500m)建設。22日C3で永沼が病死。27日登山再開し、5月3日C4(7,140m)、8日C5(7,500m)を建設し、10日、小林、重野が初登攀に成功した。11日にも清水、加藤、吉野とアン・カミが登頂。

[6] 1978年秋

群馬県山岳連盟 (18)

隊長：田中成幸(43)／隊員：×小暮勝義(35)、八木原罔明(31)、×阿久沢廣(35)、石川忍(32)、宮崎勉(30)、×深沢勇二郎(28)、宇部明(30)、真下富夫(30)、×小林清(28)、山田昇(28)、千木良一郎(26)、谷弘行(26)、阿部源(25)、金子一美(25)、鈴木茂(23)、福田純一(22)、関章司

(43)

[南東稜の初登攀を目指して入山。8月18日、BC(4,200m)設営。26日C1(4,850m)、30日C2(5,400m)、9月4日仮C3(5,750m)9日C3(5,850m)、21日C4(6,450m)建設。翌日ルート工作に出た阿久沢、深沢、小林が雪崩に襲われ南壁へ転落行方不明となった。10月7日C5(6,950m)、14日C6(7,450m)、18日C7(7,800m)建設し、19日、宮崎、宇部、谷が初登攀に成功。20日、C4～C5間で小暮が転落死亡したが、21日には山田、鈴木が登頂した。]

[7] 1981年春

高山研究所(2)

隊長：禿博信(29)／隊員：高本信子(40)

[禿が単独アルパイン・スタイル登頂をめざして登通常ルートへ入山。5月25日、5,000m地点にBC設営。28日、禿とパサンの二人が北東コル(5,720m)ABC建設。29日に出発して6,450m、7,400mと泊まり7,800mに到達したが7,600mまで降り、6月1日はそこで休養した。2日再度アタックし18時半登頂に成功した。ルート上には2週間前のカナダ隊の固定ロープが残されており助けられた。]

[8] 1982年秋

カモンカ同人(18)

隊長：佐々木徳雄(48)／隊員：高橋好輝(39)、八木原圀明(35)、石川忍(36)、宮崎勉(34)、山田昇(32)、小松幸三(28)、松永幸雄(34)、鈴木繁(29)、五十嵐文典(32)、阿久沢芳雄(25)、斎藤安平(29)、金井敏夫(25)、佐藤光由(21)、村上和也(27)、渋谷寿雄(28)、永井夏雄(29)、浅地徹(35)

[北西稜(ベアー)初登攀をめざして入山。9月20日、BC(4,600m)設営。22日C1(5,200m)、26日、八木原、宮崎、村上が雪崩を誘発八木原が負傷。29日C2(6,000m)、10月2日C3(6,700m)、10月7日、ベアーの上にC4(7,400m)、11日C5(7,550m)、16日C6(7,750m)建設。17日に高橋、松永、村上が酸素を使用してアタックしたが7,950mで断念。18日、山田、小松、斎藤が初登攀に成功した。]

[9] 1982年秋

高松勤労者山の会(5)

隊長：金沢健(36)／隊員：宮野政則(34)、田中淳一(30)、長谷伸宏(26)、三谷統一郎(26)

[通常ルートに入山。9月18日、4,650mにBC設営。27日C1(5,700m)、10月3日C2(6,650m)、15日C3(7,500m)建設。17日、田中、三谷が登頂に成功した。]

[10] 1982年冬

北海道大学(13+1)

隊長：安間荘(46)／隊員：越前谷幸平(35)、浜名純(34)、名越昭男(39)、花井修(31)、石村明也(30)、小泉章夫(27)、八木欣平(26)、毛利立夫(26)、清野啓介(26)、志賀弘行(25)、工藤哲靖(22)、下沢英二(34)／報道：先川信一郎(32)

[冬期初登頂をめざして10月28日レスト・キャンプ(4,750m)、11月8日北東コル到達、ここにBCを設営するための荷揚げ開始。12月2日コル(5,940m)にBC設営。翌日C1(6,700m)、12日C2(7,400m)、13日、小泉とニマ・ウォンチが冬期初登頂に成功した。一部では北東コルをBCとし、そこへ秋の間に荷揚げを完了したことに疑義が出された。]

[11] 1983年秋

U-TANクラブ(14)

隊長：長谷川恒男(35)／隊員：吉尾弘(46)、小野毅(38)、草野延孝(35)、角田克己(33)、富樫雅明(30)、西原一美(27)、内海正義(30)、藤井徹(26)、鳥羽利紀(26)、中里好宏(22)、長町満(35)、石井慎一(31)、井上佳(28)

[北壁と通常ルートから挑戦。9月26日マヤンディ氷河にBC設営。10月8日C1を北東コルに作ったが翌日から連続降雪。11月3日、長谷川、石井がアタックしたが通常ルートの7,500m上で断念した。帰途、陳親博(台湾)が高山病で死亡した。]

[12] 1984年冬

イエティ同人(3)

隊長：遠藤晴行(27)／隊員：尾崎隆(31)、松本正城(35)

[通常ルートから冬期登頂をめざして挑戦。11月24日BC設営。12月3日北東コルにC1、6日

C 2 (6,700m)。7日から悪天となり5日間待ったが好転せず登山を断念した。]

[13] 1987年春

グループ・ド・モレーヌ (10)

隊長：中村正勝(42)／隊員：松本清一(40)、玉井一則(38)、松林芳弘(34)、小山芳一(35)、関谷正一(36)、渡辺一儀(32)、水越晴男(32)、山岸憲一(34)、清水公男(38)

[通常ルートへ入山。3月30日、BC(4,650m)設営。7,500mにC 5建設。5月10日、関谷、水越とHAP 2名がアタックしたが、悪天のため7,955mで断念した。]

[14] 1987年秋

福岡登山研究会 (5)

隊長：三苦達久(37)、矢田康二(39)、藤原邦俊(36)、日浅俊二(30)、林康司(23)

[通常ルートに入山。9月5日にBC(4,650m)設営。10月6日、林とHAP 1名が7,050mに到達したが強風のため断念した。]

[15] 1987年秋

アウトドアーズジャパン (2)

隊長：青田浩(29)／隊員：黒沢孝夫(38)

[青田が南壁の単独登頂を目指して入山。南壁の基部にABCを作ったが、雪崩の危険のため取り付けずに終わった。]

[16] 1988年秋

青と白同人 (3)

隊長：吉谷昭博(38)／隊員：中川信(34)、伊端忠義(43)、

[通常ルートに入山。9月2日、4,700m地点にBC設営。28日、北東コルにC 1、10月2日6,560mに到達。悪天候でそこが最高到達点となった。]

[17] 1988年秋

カトマンズクラブ (6)

隊長：渡辺和文(28)／隊員：小西浩文(26)、木本哲(32)、八橋秀規(36)、林雅樹(24)、大西保(46)

[東壁をめざして入山。9月14日にBC設営。10月1日北東コルにC 1、3日北東稜6,600mにC 2、結局東壁には取り付かず登頂を断念した。]

[18] 1990年秋

女子登攀クラブ (4)

隊長：安原真百合(35)／隊員：木村文江(34)、宮坂敦子(31)、高橋あい(28)

[通常ルートに入山。9月14日BC(4,650m)設営。C 3 (7,200m)建設後、10月9日、安原、木村がHAP 2名と登頂に成功した。]

[19] 1991年秋

昭和山岳会 (9)

隊長：小野寺奇(41)／隊員：市川幸彦(44)、中島俊弥(27)、大倉栄一(42)、松元サチ(35)、横山浩二(24)、米田渉(22)、鶴見陽子(36)、小沼拓也(23)

[通常ルートに入山。9月8日BC(4,700m)設営。10月9日、7,500m地点にC 4建設。11日中島、横山とHAP 1名が登頂に成功した。]

[20] 1991年秋

イエティ同人 (3+2)

隊長：遠藤由加(25)／隊員：遠藤晴行(34)、市橋隆二(43)／撮影：2名

[遠藤夫妻が東壁を目指して入山。9月11日、ガテ・コーラにBC(4,200m)設営。16日アイスフォールに入ったが危険と判断し、北東コルから東壁を目指す。24日新BC(4,700m)設営。しかし、東壁に雪がなく断念。北東稜に転進。10月12日BCを出て北東コル、C 2と泊まり14日C 3 (7,600m)。15日、8,060mで断念。17日BCへ下り、24日C 3に入ったが、強風のため登頂を断念した。]

[21] 1992年秋

もりおか山の会 (4)

隊長：小野太一(46)／隊員：小野寺光義(46)、上野幸人(38)、阿部光子()

[通常ルートに入山。10月3日、小野とHAP 7,000mに到達したが登頂を断念した。]

[22] 1993年秋

ベルニナ山岳会 (6)

隊長：今村裕隆(33)／隊員：古関正雄(32)、渡部弘(31)、野沢井歩(28)、山口直之(24)、下村広臣(22)

[通常ルートに入山。9月9日BC設営。10月5日C 4 (7,400m)建設。6日、古関、野沢井が

登頂に成功した。]

[23] 1993年秋

長野県山岳協会(6)

隊長:中村正勝(48)/隊員:関谷正一(43)、渡辺一儀(38)、清水公男(44)、小林洋一()、荒牧由美子()

[通常ルートに入山。9月3日BC設営。10月10日に中村、関谷とHAP2名がアタックしたが8,000mで断念。翌日関谷とHAP1名が登頂に成功した。]

[24] 1994年秋

苦楽無山童子(3)

隊長:小野太一(48)、上野幸人(40)、玉内大辰(26)

[通常ルートへ入山。8月25日BC設営。9月20日雪崩でHAPが負傷、23日小野が付き添ってカトマンズへ降りた。26日C3(7,450m)建設。27日、上野、玉内とHAP3名とアタック、上野とHAP2名が登頂した。]

[25] 1994年秋

シルバータートル(7)

隊長:石川富康(57)/隊員:池田錦重(55)、小西政継(55)、根津皖一(54)、渡邊玉枝(55)、遠藤京子(56)、三浦充哲(53)

[全員50歳台で通常ルートに入山。9月8日BC設営。9月30日、7,500mにC3を建設、翌日、石川、池田、根津、渡邊、小西とHAP3名が登頂した。]

[26] 1995年秋

チーム84(6)

隊長:×俵谷久義(45)/隊員:榊原義夫(37)、澤田実(27)

[通常ルートに入山。9月8日BC設営。10月4日、澤田がHAPと登頂。6日、俵谷もHAPと登頂したが、帰途固定ロープ終了点付近で行方不明となった。]

[27] 1995年秋

宮崎大学(11)

隊長:橋本詞央()/隊員:成崎公生(48)、上田恵爾(23)

[通常ルートに入山。9月9日BC設営。10月6日、成崎、上田が登頂した。]

[28] 1995年秋

雪豹同人(5)

隊長:近藤和美(53)/隊員:宮崎孝(38)、桑原巖(59)、武田澄人(30)、林孝治(44)

[通常ルートに入山。9月12日BC設営。10月6日、林、桑原、近藤、武田がHAP2名と登頂に成功した。]

[29] 1996年秋

栃木労山(6)

隊長:野村光勇(51)/隊員:小川憲光(48)、市村敬(39)、西尾美代子(47)、湯川誠(39)、磯部等(24)

[通常ルートに入山。9月13日BC設営。10月14日C3で登頂を断念した。]

[30] 1997年春

ガイアAC(2)

隊長:小西浩文(35)/隊員:北村俊之(34)

[通常ルートに入山。5月31日、小西、北村がHAP1名と登頂した。]

[31] 1997年

JAC青年部(8)

隊長:松原尚之(32)/隊員:棚橋靖(34)、松本伸夫(32)、奥田仁一(30)、椎名厚史(28)、川高雄(23)、板谷耕介(22)、松本恵(32)

[北西稜(梨)ルートを目指して入山。9月8日BC(4,700m)設営。9月15日C1(5,450m)、19日C2(6,000m)、28日C3(6,700m)、10月16日C4(7,000m)建設。C4から11~12ピッチで北西稜上に出た。そこから9ピッチで約7,500mに到達。その後悪天が続き登頂を断念]

[32] 1998年秋

札幌登攀倶楽部(7)

隊長:斉藤勤(50)/隊員:田中規雄(30)、工藤寛(32)、杉山敏彦(28)、下間洋司(28)、木下次郎(28)、樽川高志(23)

[通常ルートに入山。9月6日BC設営。16日C1(5,700m)、22日C2(6,500m)、27日C3(7,300m)建設し、30日、斉藤、工藤、杉山、下間がHAP3名と登頂した。]

[33] 1998年

境町山の会(6)

隊長：吉田直人(43)／隊員：篠原敏雄(49)、大山洋次(40)、竹川功一(34)、矢島友生(22)、江塚進介(37)

[34] 1999年秋

チーム 8 4 (2)

隊長：平岡竜石(31)／隊員：榊原義夫(45)

[東壁を目指したが、通常ルートの7,400mで登頂断念した。]

[35] 2000年秋

名古屋山岳会 (9)

隊長：鈴木孝雄(62)／隊員：高橋優(50)、吉村賢(31)、野辺敦史(29)、淵田芳文(37)、鈴木美代(48)、谷口守(52)、柳原武彦(37)、木本哲(42)、中村広(48)

[通常ルートに入山。10月9日、7,600mに到達したが登頂は断念した。]

[36] 2001年秋

群馬ミヤマ山岳会 (4)

隊長：×星野龍史(33)／隊員：名塚秀二(46)、×品川幸彦(33)、×福本誠志(27)

[名塚は通常ルートを、残る3名は東壁を目指して入山。9月25日BC(4,800m)設営。10月2日C1北東コル(5,876m)、6日北東稜上にC2(6,500m)、8日星野らは順応のためC3(7,500m)へ向かったが吹雪きのため直下で引き返した。11日、名塚は通常ルートから登頂。12日、星野ら3名はC1から東壁にアタックするも、6,000m付近にいるのを目撃されたのを最後に行方不明となった。]

[37] 2001年秋

京都岳人クラブ (3)

隊長：山田良二(37)／隊員：仕立亮一(28)、宮川清明(60)

[通常ルートに入山。群馬隊と同一行動。10月12日、仕立が登頂に成功。]

[38] 2001年秋

クラブ・イエティ (5)

隊長：石井清(53)／隊員：矢崎政美(43)、福岡幸雄(50)、臼井健太(23)、高橋早映(27)

[通常ルートに入山。9月3日BC(4,700m)設営。17日ABC(5,100m)、20日C1(5,800m)、23日C2(6,500m)、10月1日C3(7,400m)を

建設し、2日、高橋、矢崎が3名のHAPと登頂した。同時に登頂したドイツ女性が真の頂上でなかったと報告し物議を醸した。]

20世紀日本人ダウラギリ I 登頂者リスト

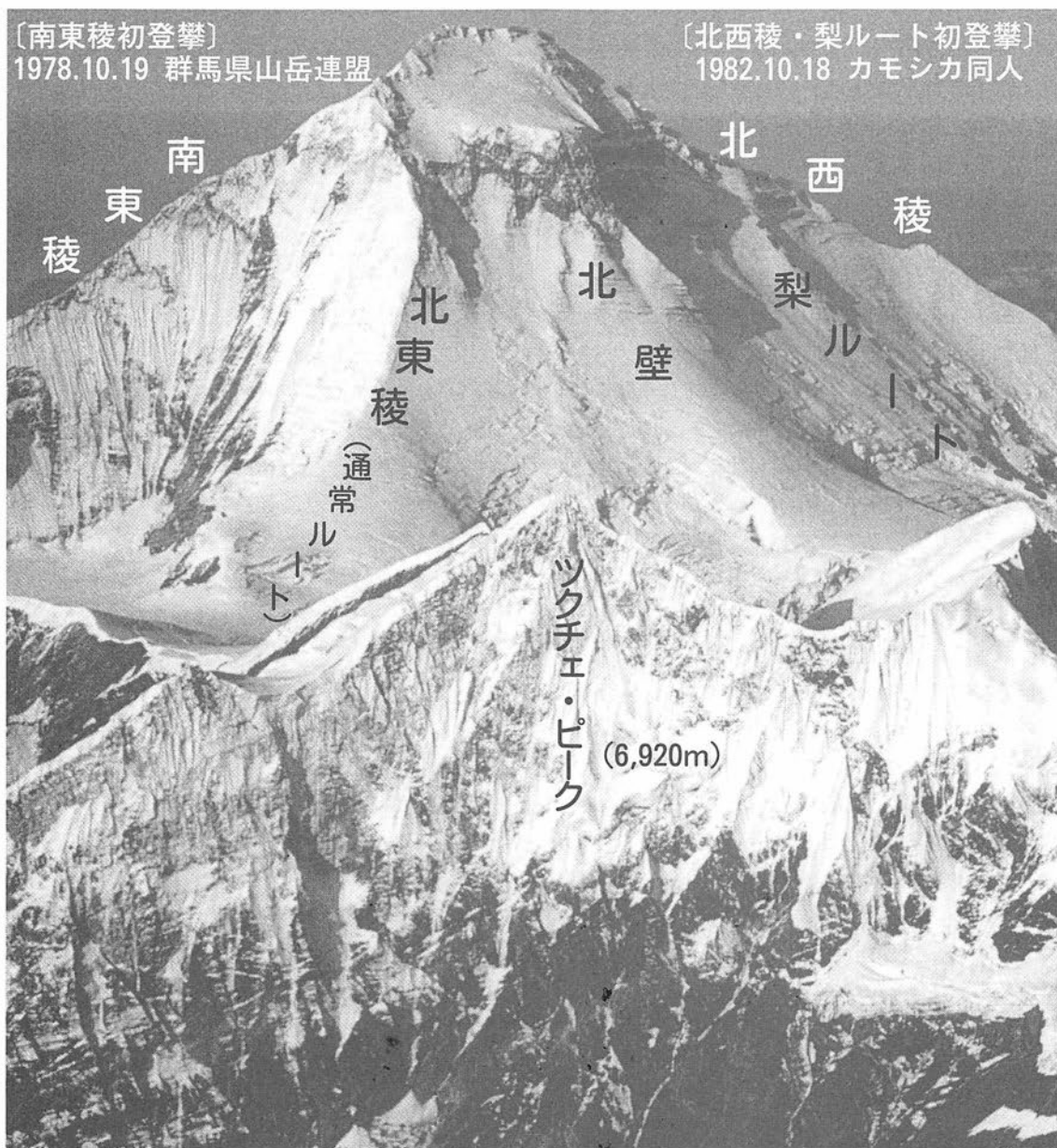
	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
1	川田 哲二	1939.11.	1970.10.20	31★
2	×小林 利明	1948.12.	1978. 5.10	29■
3	重野太肚二	1943. 4.	1978. 5.10	35■
4	×加藤 康二	1949. 3.	1978. 5.11	29
5	×吉野 寛	1950. 2.	1978. 5.11	28
6	清水 清二	1945.10.	1978. 5.11	32
7	宮崎 勉	1947.11.	1978.10.19	30■
8	×宇部 明	1948. 7.	1978.10.19	30
9	谷 弘行	1952. 1.	1978.10.19	26
10	×山田 昇	1950. 2.	1978.10.21	28
11	鈴木 茂	1955. 1.	1978.10.21	23
12	×禿 博信	1951.10.	1981. 6. 2	29●
13	三谷統一郎	1958. 3.	1982.10.17	24
14	田中 淳一	1952. 6.	1982.10.17	30
15	×山田 昇	1950. 2.	1982.10.18	32■
16	×小松 幸三	1954. 5.	1982.10.18	28■
17	×斎藤 安平	1953. 1.	1982.10.18	29■
18	小泉 章夫	1955.11.	1982.12.13	26◆
19	安原真百合	1955. 6.	1990.10. 9	35
20	木村 文江	1955.10.	1990.10. 9	34
21	中島 俊弥	1964.12.	1991.10.11	26
22	横山 浩二	1967. 5.	1991.10.11	24
23	×野沢井 歩	1964. 8.	1993.10. 6	29
24	古関 正雄	1961. 3.	1993.10. 6	32
25	関谷 正一	1950. 9.	1993.10.11	42
26	上野 幸人	1954. 1.	1994. 9.27	40
27	×根津 皖一	1939.12.	1994.10. 1	54
28	渡邊 玉枝	1938.11.	1994.10. 1	55
29	池田 錦重	1938.11.	1994.10. 1	55
30	×小西 政継	1938.11.	1994.10. 1	55
31	石川 富康	1936.11.	1994.10. 1	57
32	澤田 実	1968. 7.	1995.10. 4	27
33	成崎 公生	1946.11.	1995.10. 6	48
34	上田 恵爾	1972. 1.	1995.10. 6	23
35	林 孝治	1951. 9.	1995.10. 6	44
36	桑原 巖	1935.11.	1995.10. 6	59

	氏名	生年月日	登頂年月日	年齢
37	近藤 和美	1941.11.	1995.10. 6	53
38	武田 澄人	1965. 7.	1995.10. 6	30
39	×俵谷 久義	1949.10.	1995.10. 6	45 ↓
40	小西 浩文	1962. 3.	1997. 5.31	35
41	北村 俊之	1962.12.	1997. 5.31	34
42	斉藤 勤	1947.12.	1998. 9.30	50
43	工藤 寛	1966. 6.	1998. 9.30	32
44	杉山 敏彦	1970. 3.	1998. 9.30	28

	氏名	生年月日	登頂年月日	年齢
45	下間 洋司	1970. 6.	1998. 9.30	28
46	高橋 早映	1974. 3.	2001.10. 2	27
47	矢崎 政美	1953. 4.	2001.10. 2	48
48	名塚 秀二	1954.11.	2001.10.11	46
49	仕立 亮一	1972. 5.	2001.10.12	29

(注)★は日本人初登頂。■は初登攀。
●は単独。◆は冬期。↓は登頂後下山中死亡。

※ダウラギリ I (8,167m) 日本隊初登攀ルート (写真: OVER THE HIMALAYA 大森弘一郎より)



小暮勝義 (KOGURE Katsuyoshi)

1943. 3. 1~1978.10.20 群馬県佐波郡境町生れ。17歳から山登りを始め1961年境町山の会入会。62年6月谷川岳一ノ倉沢烏帽子岩奥壁凹状岩壁単独初登攀、11月衝立岩ダイレクトカンテ試登。63年6月一ノ倉沢滝沢ダイレクト第2登、8月利根源流越後沢右俣大滝初登攀。66年5月黒部丸山南東壁小暮・塚田ルート初登攀、10月黒部奥鐘山紫岳会ルート第2登。67年5月凹状岩壁〜コップ左岩壁第2登。68年衝立岩A字ハング直上ルート初登攀、8月黒部別山谷カベ尾根フェース初登攀、10月奥鐘山南西壁初登攀。70年(夏)RCCⅡがソ連カフカズ、シケリダ氷河に派遣した登山隊(車義久隊長ら6名)に参加、海外登山初経験となった。72年(春)群馬県山岳連盟がネパールのダウラギリⅣ(7,666m)に派遣した登山隊(小林二三雄隊長ら9名)に参加、C4(6,200m)に到達したところで松井高重郎隊員が高山病で死亡したため登山を断念した。73年(秋)RCCⅡがサガルマータ(8,848m)に派遣した登山隊(湯浅道男隊長ら46名)に参加したが目標とした南西壁は8,400m地点に到達して断念、南東稜から加藤保男、石黒久が秋季初登頂に成功して登山を終えた。終了後、小暮はガウリサンカール(7,134m)偵察。78年(秋)群馬岳連がダウラギリⅠ(8,167m)に派遣した登山隊(田中成幸隊長ら18名)の登攀隊長として未踏の南東稜に挑戦。隊は10月19日宮崎勉ら3名が初登攀に成功したが、翌日、小暮はC4(6,450m)上で固定ロープにぶら下がって死亡しているのが発見された。早くから東京の岳人と交流し厳しい岩壁登攀を实践。群馬岳連の若手の育成に努め、八木原明明、宮崎勉、山田昇らに強い影響を与えた。遺稿追悼集に「わが青春の山々」(S61年)がある。

早坂敬二郎 (HAYASAKA Keijiro)

1946. 8. 6~1992. 3.22 山形県羽黒山宿坊(大進坊)生れ。1962年鶴岡南高校に入学、山岳部に所属し登山を始め東北の山々を登る。66年東京農業大学入学、山岳部に所属し本格的な登山を实践。

70年(夏)卒業と同時に先輩の甲田ら4名でインド、ブラマーⅠ(6,416m)に初遠征したが登頂はならなかった。終了後ネパールに渡りカンチェンジュンガ山群偵察。翌71年(夏)再びインドに渡り、シックル・ムーン(6,575m)に挑戦。メンバーは金子浩、原康博、桜井薫の4名。ドーム(5,700m)頂上に到達したが断念した。74年JAC入会。75年(夏)ペルーアンデス、ポンゴス北峰(5,680m)、エクアドル、チンボラソ(6,310m)登頂。76年(夏)アコンカグア(6,952m)登頂。同年アウトドア・ショップのデバック開設。86年(夏)農大が中国、崑崙山脈の最高峰(7,167m)に派遣した登山隊(隊長以下11名)の隊長として隊を率い、7月20日、南面5,315mにBC設営。8月16日、小林新二ら5名が初登頂に成功、早坂も翌日登頂した。87年(夏)アウトドアーズ隊(玉田仁隊長ら5名)に参加し、ナンガ・パルバット(8,126m)ルパール壁に挑戦したが、9月3日、玉田、河野兵市と共に6,650m地点で雪崩に遭い断念した。89年(夏)今度は農大がナンガ・パルバットに派遣した隊(隊長ら17名)を率い6月18日ルパール村にBC設営。ラキオト・ピーク南東稜に取り付き5,600m地点にC3を建設したが、7月16日、馬場哲也が落雷に遭い18日死亡した。その後も登山を続行したが雪崩に遭い断念した。90年(秋)JACが中国と合同でチベットのナムチャ・バルワ(7,782m)に派遣した偵察隊(重廣恒夫隊長ら4名)の副隊長として参加、ナイプンからコルへの下降ルートを確認した。91年(夏)農大がブロード・ピーク(8,051m)に派遣した登山隊(隊長ら6名)を率い西稜から挑戦。7月12日、早坂は谷川太郎ら4名と共に登頂に成功し初めて八千メートル峰の頂上に立った。同年アコンカグア登頂。92年、農大の合宿に参加し3月22日、大天井岳頂上から下降中、雪崩に遭い行方不明となった。遺体は6月に収容された。「農大の山登り」に固執し、チーム登山を重視し、農大のヒマラヤ登山全盛の基礎を築いた。その人柄は「早坂教」と称されるほどの信奉者を生んだ。遺稿追悼集に「長き尾根の果てに」(1995年)がある。

野中和雄(NONAKA Kazuo)

1949. 3.13~1980.12.21 栃木県栃木市生れ。栃木農業高校時代から山登りを始める。1967年、羚羊山岳会入会。谷川岳を中心に岩壁登攀を行う。72年(夏)ヨーロッパに渡りグランド・ジョラス北壁、ピッツバディレなどを登攀。74年(夏)マッキンリー(6,194m)登頂。76年(夏)再びヨーロッパに渡る。78年(秋)H A Jがインド、トリスル(7,120m)に派遣した登山隊(稲田定重隊長ら19名)の副隊長として参加。9月20日、安中秀子、釣部恵子ら6名とII峰(6,690m)に北稜から初登攀した。同日、主峰には角田不二、飛田和夫ら6名が南稜から初登攀に成功し、野中は成田から成田まで4週間の遠征を成功させる原動力となった。野中は81年H A Jカンチェンジュンガ計画のメンバーだったが、80年栃の葉国体終了後に地元「栃木県南地区山岳協議会」からインド、クン(7,077m)へ派遣する登山隊を率いるためカンチ計画を離脱、そのクン隊の合宿で80年12月谷川岳東尾根に6名で入山したが行方不明となった。遺体は翌年8月に収容された。寡黙で勉強家で登山家として県南の期待を一身に集めていた。遭難追悼集に「昂'80谷川岳東尾根登山遭難追悼集」(S57年)がある。

亀井建樹(KAMEI Tateki)

1950. 7.21~1978. 6.20 埼玉県与野市生れ。浦和高校時代はサッカーに興じる。早稲田大学入学後登山を始める。1972年山嶺登高会に入会。1975年1月、唐沢岳幕岩正面壁島ルート冬期第二登。77年1月同正面壁山嶺第二ルート冬期開拓初登攀。78年2月同左岩壁S字状ルート冬期第二登。77年(夏)H A Jがカラコルム、バトゥラ山群に派遣した偵察隊として大久保真、現地合流した片岡邦夫とバトゥラ南面、ハチンダール・キッシュを偵察。翌78年(夏)山嶺登高会が初登頂を目指したハチンダール・キッシュ(7,163m)登山隊(緑川広隊長ら7名)に参加、6月19日、緑川隊長と頂上アタックを行ったが、6,600mの最高到達点で登頂を断念。下山中の20日、C3(5,030m)上で固定ロープの切断のため転落死亡。遺体は確認されたが収容されなかった。亀井はクライマーとしての能力もさることながら、物事全般におよぶ博識

と軽妙な会話、加えて常に前進しようとする意思と行動力をもって信望を集めていた。ある意味では変革しつつあるクライマー社会のなかで、次ぎの世代のリーダートナル資質を備えた一人であり、H A Jが81年に計画していたカンチェンジュンガ縦走の中核として期待されていた。遺稿追悼集に「かくてこの道は星にまで」(1979年)がある。

望月忠(MOCHIZUKI Tadashi)

1940. 9.23~1980. 8.28 静岡県富士郡芝川町生れ。18歳から単独行を行う。1960年富士宮山岳会入会。61年9月北岳バットレスCガリー大滝~中央稜、12月~62年1月同第四尾根フランケ冬期第二登。62年9月前穂高岳東壁右岩稜~Dフェース中央ルート。63年東芝富士工場山岳部に入る。64年6月第19回国体(飯豊連峰)参加。65年12月甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁左ルンゼ冬期初登攀。66年1月前穂高岳Dフェース中央ルート、10月富士山剣ヶ峰大沢下部初溯行。67年東芝山岳部退部、夏、ヨーロッパに渡りピッツ・バディレ北東稜など登攀。68年9月錫杖岳烏帽子岩前衛フェースV字岩壁初登攀。69年4月三方崩山大ノマ谷第三岩稜初登攀。70年2月甲斐駒ヶ岳赤石沢奥壁ダイレクトルート冬期初登攀、5月明神岳V峰東壁メガネハングダイレクトルート単独初登攀。71年(春)富士宮山岳会がネパール、プロモ・リ(7,181m)に派遣した登山隊(望月喜儀隊長ら13名)の登攀隊長として参加、南壁の5,740mまで到達するも登頂を断念した。この登山隊はシェルパレスと一人当たりの負担金30万円説を掲げたが、東パキスタン独立騒動の影響もあって40万円を切る程度になった。72年1月明神岳V峰東壁中央フェース東雲ルート冬期初登攀、1月錫杖岳V字岩壁冬期初登攀。73年(春)登攀倶楽部プロモ・リ登山隊(中村重行隊長ら14名)の登攀隊長として参加。5月1日重野太肚二と下坂信夫が南稜から初登攀に成功した。今回もシェルパレスを実行し、負担金も一人当たり33万円であった。80年8月27日、唐沢岳幕岩正面壁島山ルートを登攀すべく取り付けに向かっていましたが、滝に残置されていた固定ロープが切れて転落、翌日救助されたものの死亡した。登山界に「地方の時代」が抬頭した頃の一方の旗手として、登攀の実践を

元に論も立ち文も書けた貴重な存在であった。葬儀に一千名も駆けつけたことがそれを物語っている。遺稿集に「孤高と大地」(S57年)がある。

土居正勝 (DOI Masakatsu)

1944. 7.17~1991.10.15 宮城県気仙沼市生れ。1960年県立気仙沼高校入学、山岳部に入り山登りを開始。奥羽山脈、北上山地の山々を登る。62年夏インターハイ(谷川岳)に宮城県代表として参加。63年国土館大学入学も直後に退学し64年法政大学に入学しⅡ部山岳部(HMC)へ入部。谷川岳、北アルプスで四季の登山経験を積みながら、卒業以降は一ノ倉沢、穂高滝谷の積雪期単独登攀を実践した。67年2月に積雪期一ノ倉沢第三スラブが森田勝、岩沢英太郎によって登られると、単独での攻略を目指して74年3月まで毎冬のように三スラブ通いを続けたが、完登のチャンスは訪れなかった。75年5月、HMCがマッキンリー(6,194m)に派遣した登山隊(伊藤正毅隊長ら12名)の副隊長として参加。ウェスタン・リブ左稜から井

上、内田の2名が登頂した。79年(夏)HMCがカラコルム、ルプガール・サール(7,200m)に派遣した登山隊(隊長ら8名)を率いて入山。8月4日、名塚達夫、渡辺裕一、清水人志が西峰に西ドイツ隊に次ぐ第二登、そのまま稜線を行き中央峰の初登頂に成功した。81年(秋)HMCが初登頂に成功したドルジェ・ラクパ(6,992m)派遣の原動力となった。85年(夏)HAJナンガ・バルバット訪問団団長。80年5月、都岳連海外委員長(常務理事)に就任(2年間)。6月日山協海外登山常任委員。90年5月HAJ理事。HMC中興の祖として、海外登山の道を切り拓き、片岡邦夫、村上和也、三枝照雄、小田隆三などのヒマラヤニストを育てた。「蔵王の山男」に謳われるような、厳しさの中に優しさを兼ね備えたアルピニストとして、HMCはもとより多くの岳人から慕われた。91年10月肺癌のため死去。追悼集に「土居正勝追悼号」(HMC・OB会報第13号、1992年)がある。

■ 寸 感 ■

東京は7月6日から今日で21日間連続して気温30℃を超えた。日本の山では、新潟、福井の豪雨で沢登りの遭難が続いた。そのうちの一件では、入山者が自分の入った山が「警報」の出ている地域に含まれているとは知らなかったとか。

中国の登山界も急変しているようだ。学生を中心にした「高峰登山」は危惧していたように「遭難」が続出している。一方、野外活動の指導者を育成するために「武漢地質大学」に専門講座が開設されつつあるという。「十年一昔」を笑ったこともあったが、今や「十年三昔」前を感じる。(山)

事務局日誌(7月)

- 5日(月) 中国登山協会交流部李豪傑副部長ら4名と懇談
- 6日(火) 同上歓迎会、於麴町、山森、中岡、森山
- 7日(水) パスーBC訪問団山岳共済手続き
野沢井歩前専務理事一周忌通知を関

係者62通発送

- 9日(金) 山岳4団体三役懇談会、於かんぼヘルスプラザ東京(酒井、山森、尾形、中岡)
ヒマラヤ393号発送
- 13日(火) 堤信夫出版記念会(山森、尾形)
- 16日(金) 「華甲望年会」該当者へ通知、13人
- 20日(火) アテネ書房と出版協議。東京39.1℃
- 26日(月) 東京集会(10名)
- 28日(水) 名塚秀二さん壮行会、かんぼヘルスプラザ東京(酒井、山森)

ヒマラヤ No.394 (9月号)

平成16年8月10日印刷 16年9月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャロパンドスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル ☎0120-811395
(通話料無料)をご利用下さい。

株式会社 西遊旅行
国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp)

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局 中日新聞東京本社
〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中ビル6F
[TEL] 03-3595-4830(代) [FAX] 03-3595-4831
http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/
※定価額に消費税も含まれています。

<p>山書散策 河村 正之 著</p>	<p>登山の運動生理学百科 山本 正嘉 著</p>	<p>女性ガイドのしなやか登山術 樋口 英子 著</p>	<p>新・山の雑学ノート・第1集 岳人編集部 編</p>	<p>中高年の雪山入門 福島 正明 著</p>	<p>すぐ役立つ山のメモ帖 岳人編集部 編</p>	<p>チャレンジリアルバイキングライミング 【南アルプスハケ岳・谷川岳編】 廣川 健太郎 著</p>	<p>チャレンジリアルバイキングライミング 【北アルプス編】 廣川 健太郎 著</p>	<p>山小屋の主人の炉端話 工藤 隆雄 著</p>	<p>ベシック・フリークライミング 菊地 敏之 著</p>	<p>最新クライミング技術 菊地 敏之 著</p>	
<p>今まで数多く発刊された山書。何を読んだらよいかわからない。そんな時の指針として、「岳人」連載時から好評。</p>	<p>万が一の合理的な安全な登山ができるのか。一歩ヒマラヤなど高所登山実録を踏まえて、分かりやすくまとめた。</p>	<p>ガイドのテクニックを登山講座。</p>	<p>常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっとと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。</p>	<p>山での話題が登った山の数だけではない。豊富な雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。</p>	<p>低山から夢のヒマラヤまで、トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を堪能しながら、雪山歩きを楽しむ。</p>	<p>登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を提供。</p>	<p>上巻の北アルプス編に続いて、南アルプスハケ岳・谷川岳などから、日本を代表するアルバイキングライミング12本を、写真を豊富に使ってわかりやすく解説したルートガイドの決定版。</p>	<p>北アルプス全域を代表するカレットを分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁・雪壁のハリエ・シヨルトに加え、これまでほとんど紹介されていなかった岩壁登攀ルンセ登攀を紹介。</p>	<p>著名な山小屋の主人たちが宿の登山者に炉端で語る人話の取っ置きのお話。</p>	<p>新しい生糸ポットとあらゆる世代に爆発的な人気のフリークライミングをムフの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スキルアップのしかたを取り組む方法を必要不可欠な多項目にわたってビジュアルにわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムからはじめてアウトドアを目指すすべてのクライマーのための教則本の決定版。</p>	<p>フリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグウォールまですべてのロッククライマーへの、実践的な最新技術書。つひつひと技術を進める「マニアル」としてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。</p>
1,575円	2,100円	1,575円	1,470円	1,680円	1,470円	2,625円	2,625円	1,575円	1,785円	1,680円	

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073 東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802 埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大阪ミナミ店	〒556-0005 大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021 兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部 (メールオーダー係)	〒169-0073 東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620			
松本店	〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039			
長野店	〒380-0825 長野県長野市未広町1356	026-229-7739			
茅野駅前店	〒391-0001 長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510			
新潟店	〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330			



ICI 石井スポーツ